

くらしの良品研究所の活動

くらし中心～「かたがみ」から始まる part1 家具のかたがみ展

家具の「かたがみ」とは家具の設計図のことといえるでしょう。近代化は大量生産を目指して、同じものを再生産するために設計図をつくりました。そしてそれは、デザインをする人ともものをつくる人の役割分担を生むことにもなりました。近代化が始まって100年以上が過ぎようとしている今。大量生産のための設計図から、使い手一人ひとりがものをつくるための「何か」が必要とされているのではないのでしょうか。今回のかたがみ展では、設計図をあえて「かたがみ」と呼ぶことで、現代におけるデザイナーともものをつくる人との関係を見つめ直し、つくるという行為を、生活者一人ひとりの手に取り戻していくことを考えてみました。それは、近代化が本来目指した、本当の意味での豊かさに一歩近づくことになるかもしれません。

会期： 2012年10月26日(金)～11月18日(日)
時間： 10:00～21:00(会期中無休)
会場： ATELIER MUJI(無印良品有楽町2階)
入場料： 無料



くらしの良品研究所とは

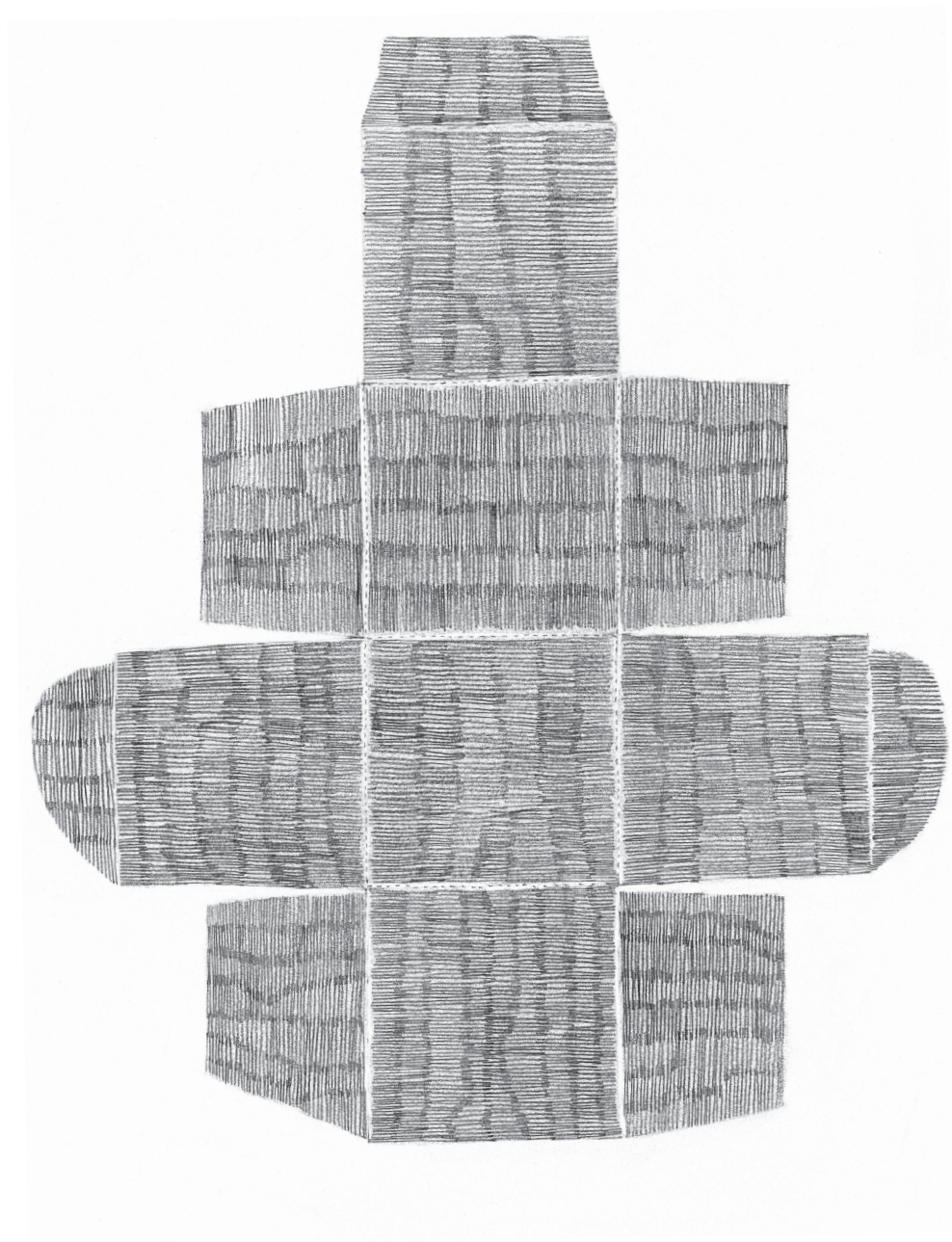
「くりかえし原点、くりかえし未来。」を合言葉に、これからの時代に求められる良品像を、みなさんと一緒に探っていく“ラボラトリー”です。店舗とインターネットを介して、生活者であるお客さまと対話しながら、既存商品を点検し、新しい商品を育て、世界のより多くの人々に「これでいい」と共感していただける、感じいい暮らしのかたちを考えていきます。

◇この小冊子は、背表紙に付いた2つのリングをファイルの穴に通して、ストックすることができます。

facebookを利用して、読者のみなさんからのコメントやご意見を公開。ユーザー同士の意見交換も可能になり、たくさんのご意見を共有できるようになりました。

no.09

「かたがみ」から始まる



無印良品

くらし中心

「かたがみ」から始まる

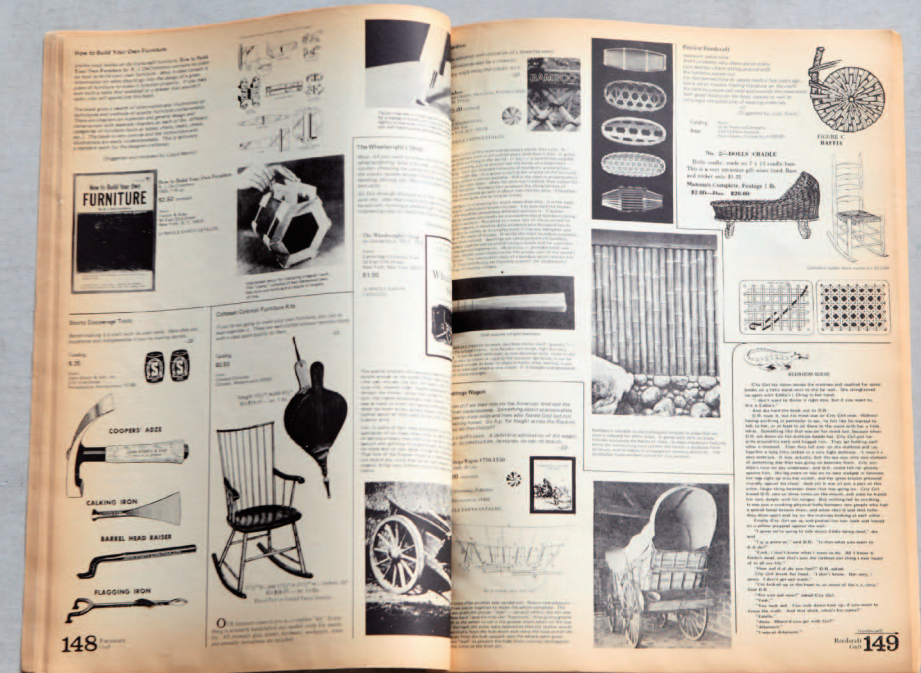
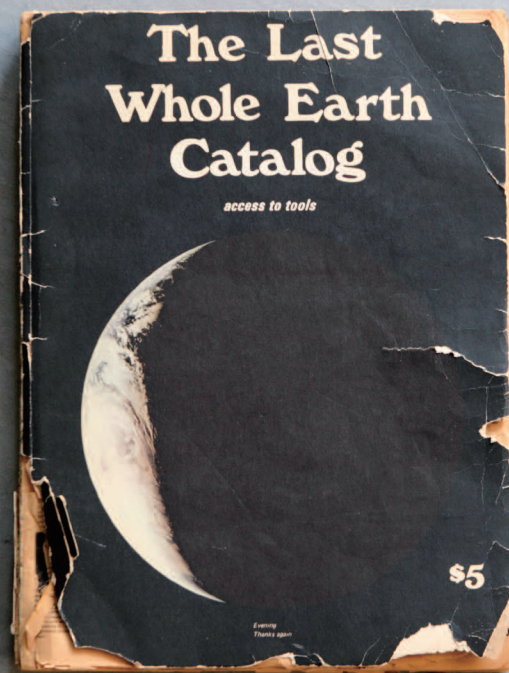
「かたがみ」とは、簡単に複製をつくるための道具です。「かたがみ」があれば、欲しいものを自分で容易につくることができますし、もとのカタチを自分の好みやサイズに合わせて変更することもできます。お金さえ出せば何でも買える時代ですが、つくるといふ行為には、私たちの中に潜む創造性を喚起するものがあります。つくる過程が楽しいだけでなく、手間ひまかけてつくったものには愛着も湧いてくるでしょう。自分の手でつくる——それは、工業化社会の発達とともに置き去りにしてきた大切なことを、もう一度、私たちの手に取り戻すことなのかもしれません。

20世紀は、一つの地域に一つの図書館をつくり、読み書きというリテラシーを身につけた時代でした。そしていま、一つの街に一つの工房をつくっていかうという活動が始まっています。「ファブラボ」と呼ばれるその活動の目指すところは、ものをつくるリテラシーを多くの人が手に入れること。その工房で活躍するのは、コンピュータデータを送ると自動で裁断したり、立体をつくり出してくれるデジタル工作機械です。こうした技術の出現によって、大量生産を前提にしていた複雑なプロダクトが、たった一品でもつくれるようになるのだといえます。新しい道具の普及が、新しいものづくりの時代をつくるのかもしれませんが、今回特集する「かたがみ」も、ものをつくるための道具です。しかし、それだけではなく、ものをつくる時の基本の知識や体系といった意味にもとらえられそうです。そんな「かたがみ」を考え続けることは、暮らしのありかたを考えることにもつながるでしょう。現代の「かたがみ」とは何か、今の時代をどう生きるのか、といった根源的な問いへと、思考を広げていくこともできそうです。4人のプロフェッショナルのお話も伺いながら、「ものづくりのかたがみ」という視点を通して、その背景にある「暮らしのかたがみ」を探し、これからの暮らしのありかたを考えてみたいと思います。

生きるための、かたがみ。

定期刊行時代の最終号（1971年）。その後も、1974年、1980年、1994年、1998年と不定期に発行されました。現在、すべての雑誌がweb上で公開されています。
<http://www.wholeearth.com/index.php>

よりよく生きるために必要な情報を共有しようと、1960年代のアメリカで生まれた雑誌、「ホール・アース・カタログ」。あらゆる分野の情報と知恵を載せたそのカタログは、まさに「暮らしのかたがみ」と呼ぶにふさわしいものでした。



「自分でつくる」ことは、「自立する」こと。

「ホール・アース・カタログ」は、1960年代のアメリカで、その時代の多くの若者たちが目指した生き方を支えるために生まれた雑誌です。そこには、よりよく、より豊かに生きるためのあらゆる情報が載せられていました。スティーブ・ジョブスの有名な言葉「Stay hungry, Stay foolish」は、この雑誌の最終号の見出し。当時、ヒッピーをはじめ多くの若者たちが、経済の豊かさや便利さだけでは社会が立ち行かなくなると感じて街を離れ、自然の中で暮らしたり、農業をしたりとさまざまな活動を始めていて、ジョブスもそんな若者の一人だったのです。そうした時代に、世の中の素晴らしいものを、さらには昔からの知恵や経験をも紹介していこうとしたのがこの雑誌です。火のおこし方から家の建て方、野菜の育て方、

出産の仕方、ストーブや車、卓上計算機など、あらゆる分野の情報と知恵を載せた生き方のカタログでした。この雑誌の創始者はスチュアート・ブランドという当時29歳の青年です。名門スタンフォード大で生物学を学んだ彼は、社会が消費へと向かう中、より自立した生き方を、自然の仕組みに沿った生き方を、目指しました。単なる自然回帰ではなく、最新のテクノロジーも利用しながら、エコロジーやエネルギーといった、今まさに私たちが直面しているような課題と向き合い、50年近く前に警鐘を鳴らして実践していたのです。このブランドに多大な影響を与えたのは、建築家で哲学者、エコロジストでもあったバックミンスター・フラウでした。地球全体の存続を考える大切さを訴えた、「宇宙船

地球号」という言葉でも有名です。建築家であるフラウは、だれもが簡単につくることのできる家を開発したり、街全体をおおう巨大ドームでエネルギー効率を高める仕組みを考えたりもしました。彼らは自立することを目指し、地球全体で考え、長い時間軸で地球の未来を考えて提案をしていったのです。こうした活動の中からコンピュータやインターネットが生まれていきました。技術に頼るのでなく、技術を活用してよりよく生きるための方法を模索していくカタログ。1968年からスタートしたこの雑誌は、1998年で終了しましたが、当時のアメリカの多くの人の心に刻み込まれ、暮らし方の手引きとして今も大切にされているのです。今回の特集のはじめにこのことをご紹介しますのは、このカタ

ログがまさに「暮らしのかたがみ」だと考えたからです。「かたがみ」はものをつくるための道具であると同時に、基本であり、知識の体系でもあります。「かたがみ」を単に道具としてとらえるのではなく、その「かたがみ」を使ってどういう暮らし方を目指していくのか。そこには、哲学や思想も入ってくるかもしれません。自立とは、できるだけ自分で行うこと。食べるものも、エネルギーも、必要なものを自分でつくること。「自分でつくる」という生き方の中に、人間が本来持っていた自然との調和も生まれてくるのでしょうか。経済成長や化石燃料の限界が言われる時代に、今までの延長線上にはない生き方、暮らし方を目ざしていくキーワードとして、「かたがみ」を考えてみたいと思います。

かたがみの、基本形。

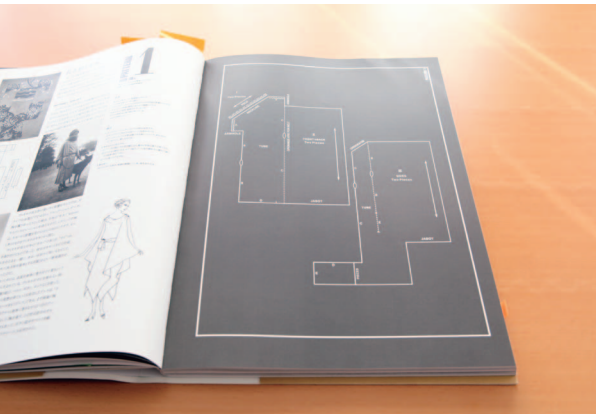
かつて、布は手間と時間をかけてやっと手にできる貴重なものでした。そんな布を余すところなく使った直線裁ちは、衣服の原形ともいえるもの。いまも民族服に生きるその知恵を、FOUND MUJI の衣服で現代に再現したデザインディレクター、清水さんに聞きました。

1枚の布が持つチカラを生かすために。

「動物や植物は、人間の“着るもの”になるために生まれてきたわけではありません」清水さんの話は、そんな言葉から始まりました。衣服のもとになる布は、人類が長い歴史の中で、植物の繊維や動物の毛を素材に、裂いたり、紡いだり、織ったりして手間と時間をかけて作り上げたもの。その貴重な布を使って作る初期の衣服は、直線裁ちでした。「布を作ること自体がとても大変だったから、それを切り刻むなんて思いもよらなかったでしょう」と清水さん。そう言われてみれば、ギリシア、ローマ時代の衣服も、日本のきものををはじめとする多くの民族服も、直線裁ち。直線裁ちは、衣服の原点といえそうです。

そんな衣服の世界に変革が起きたのは、12～13世紀にかけて。それまで、男女ともにほとんど同形の衣服だったヨーロッパでは、男性服も女性服も、身体のラインにそった衣服が進化し、複雑になっていきました。仕立屋は、伸縮性の乏しい布地も使いこなすため、カッティング技術を磨いていかなければなりませんでした。型紙は、衣服の作り方、すなわち、衣服の構造を表しているわけです。

日本に目を移すと、戦後、日常着がきものから洋服へと移行していく中、女性たちは手作りで洋服を作っていました。



現代服の礎をつくったヴィオネの長方形使いは、日本のきものから影響を受けたものです。
出典：「ヴィオネ」ベティ・カーク著／求龍堂

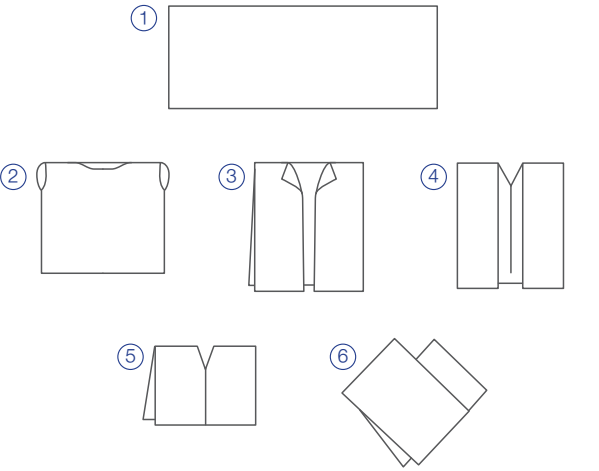


まちの部分も四角形を基本に直線を使っています。民族服にも見られる特徴です。

リネンちりめんフレアブラウス
1230528 税込 **18,000**円

その設計図となったのは、「原型」と呼ばれる、着る人の体型に沿った形の型紙です。しかし既製服産業が拡大するにつれて、暮らしからは「手作り」が消えていきます。経済という大きな歯車の中で、せっかく手に入れた型紙を、衣服を作る基本のノウハウや喜びを、手放してしまったのです。そして、型紙は大量生産のための設計図として使われることが多くなりました。型紙のおかげで時代の空気や気分がいち速くカタチになる一方、めまぐるしく変わるデザインに振り回されることにもなったのです。

それだけに、「一歩間違えると、1枚のシンプルな布が持つチカラや着る人の気持ちに及ぼす影響といった大切なことを忘れがちになる」と清水さんは語ります。衣服とは、本来は



衣服の祖型。いろいろな民族服は、四角がもとになっているのがわかります。日本のきものや朝鮮半島のチョゴリなどは、③から派生したもの。

そういうものではなかったはず。そんな想いから、清水さんは直線裁ちの服に関わってきました。そして、自らデザインディレクションしたFOUND MUJIの衣服を通して、第二の皮膚ともいうべき「布」の大切さを提案したいと考えたのです。それは、無印良品にとっても、もう一度衣服の原点を見つめ直す作業でした。

「直線裁ちの基本は、長方形や正方形といった四角形。自然の中にはない、人間がつくりだした美しいフォルムです。」布を最大限に生かすことのできる四角形は、各地の風土にあったカタチで伝承されていきます。東アジアの民族服は長方形の織物をつぎ合わせて、アフリカのそれは細い帯状のものをつぎ合わせて。身近な形だけに見落とされがちですが、衣服を考える上で四角形はもっとも基本の形であり、型紙の基本形ともいえるのです。

また直線裁ちの服は、「着付ける」ことによってデザインされる服。人間の体形に合わせてデザインしてきた西洋型の衣服とは対照的です。暑さの厳しい地域では、身体にフィットするより、身体と衣服の間に空気の流れが生まれる形のほうが涼しいということもあったのでしょう。

FOUND MUJIの衣服ををディレクションする上で、清水さんは二つのことにこだわりました。ひとつは、素材選び。身にまとう布自体も、着る人に感じてもらいたいからです。その裏には、日本ならではの技術を持ちながら、衰退していく日本の産地を応援したいという気持ちもありました。そしてもうひとつは、直線裁ちの服を、民族服のままでなく、いかに洗練された「現代の服」に仕上げるかということ。直線裁ちでは、前身頃と後ろ身頃のボリュームやタテヨコのバランスなど、ほんのちよとした比率の違いが、できあがりのイメージを大きく左右します。清水さんの言葉を借りれば、「シン



腰の周りがゆったりしたサルエルは、身体をリラックスさせてくれます。動きやすく、実用的な衣服です。

リネンちりめんサルエルパンツ
1230135 税込 **20,000**円

ブルだからこそ、感性があらわになる」のです。型紙はすべての人が共有してものを作ることのできる基本的なツールですが、「その先」を追求すると、プロとしての技量が問われるということなのでしょう。

「その先」のことはプロに任せるとして、手作りするのなら、西洋型の衣服より直線裁ちのほうがやさしいことは間違いありません。直線裁ちなら、高級なミシンや特別な技術がなくても、できそうな気がします。自分のものを自分で作る「手作りの喜び」を私たちの手に取り戻すためにも、型紙と直線裁ちを、もう一度見直してみたいものです。

※掲載商品のお取扱いは、下記店舗のみとなります。
Found MUJI取り扱い店舗：
Found MUJI青山、有楽町、池袋西武、テラスモール湘南、難波、MUJIキャナルシティ博多



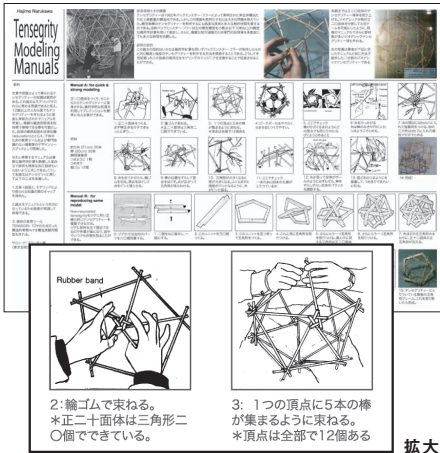
清水 早苗 Sanae Shimizu
ファッションジャーナリスト
衣服デザインに関する記事を、デザイン誌や新聞に多数寄稿。その一方で、日本の繊維・ファッションの創造性を発信する情報誌の編集や展示会のディレクションなども手がける。

建築に見る、かたがみ。

建築と聞いて、私たちが普通に思い浮かべるのは設計図です。
しかし、立体を2次元に投影する設計図では、表わせないものもあるのだとか。
立体を平面に落とす研究をしている建築家、鳴川さんは、
具体的な設計の道具として「かたがみ」を使っています。



ワイヤーが引っ張り合うことで形が決まっていくテンセグリティーの模型。バスケットボールのように硬く、床に投げると跳ね返ります。



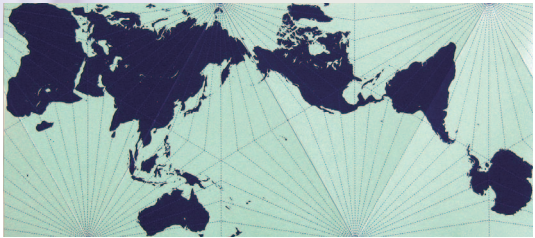
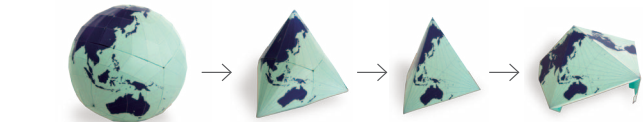
むずかしい計算が必要だったテンセグリティーの組み立てを、計算なしで、一人で、半日でできるように工夫されたモデリングマニュアル。

かたがみには、膨大な情報が詰まっている。

建築には2つの源流があるといいます。水平垂直でできた「パルテノン神殿」と球体（ドーム）でできた「パンテオン神殿」です。水平垂直のほうが設計しやすくつくるのも簡単なので、大多数の人はその方法で建築を考えます。一方、ドームの歴史も脈々と受け継がれてきました。しかし球体をつくるには、その伝達方法がネックになります。球体を投影してできた図面に物差しをあてても、その長さがわからないからです。そんな時に威力を発揮するのが「かたがみ」。鳴川さんは、移動型プラネタリウムとして設計されたドームの「かたがみ」(右の写真)を使いながら説明してくれました。たった2種類の三角形からできたその展開図は、それを切り出して組み立てれば、実際のドーム建設の方法もシュミレーションできます。「どんなに精巧なCGを使っても画面では理解しにくいのですが、模型をつくりさらに三角形を組み合わせていくと、現場の人たちに安心してもらえます」。たしかに、実際に模型に触てみると、その仕組みは一目瞭然。鳴川さんは立体になる直前のものを「かたがみ」と規定しますが、これを見erとうなずけます。



鳴川さんはまた、立体を平面に落とす研究の成果として、地球儀の模型と、それをひずみの少ない平面に落としていく仕組みも見せてくれました。鳴川さんが考案したこの模型は、市販もされていて、紙の質や厚み、折りなど、隙間なく差し込んで組み立てられるための、あらゆる情報が詰め込まれています。「かたがみ」は地球儀をつくるためのツールでありながら、完成された「かたがみ」それ自体も、すべての情報が詰め込まれた精緻な作品なのです。鳴川さんの考える「かたがみ」は、もうひとつあります。それは、組み立て方を詳細に説明したもの。その事例として、鳴川さんが考えた球体のテンション構造のモデル(左上の写真)とその組立図(左の図)を見せてもらいました。「割り箸5本を輪ゴムで束ねて、糸でつないで、輪ゴムをずらしながら広げて…」29枚の絵とやさしい解説で書かれています。この立体は、テンセグリティーと呼ばれているもの。4ページでご紹介した「ホールアースカタログ」にもたびたび登場する建築家、バックミンスターフラー(1895-1983年)が考案した構造です。これを組み立てるには、



考案したフラーの開発チームですら「手間と時間」がかかったと言われ、理解はできても実際に組み立てた人が非常に少ないため、これまで実用化にはほとんど至りませんでした。鳴川さんが、こうしたことを考えるようになったきっかけは、建築家バックミンスターフラーを知ったことです。このテンセグリティーの構造を使い、フラーは1968年に「マンハッタン計画」を提案しました。マンハッタンを巨大ドームでおおうことで、凹凸のある建築物の表面をカバーし、外気に触れる表面積を一挙に減らしてエネルギー効率を高めようという画期的なアイデアです。しかも、20トンのアルミがあれば半径1600メートルの広さをカバーできるという世界最軽量の構造体。しかし、実際に組み立てることがむずかしすぎたため、ついには馬鹿げた夢物語と片付けられるようになったのです。そんなむずかしいテンセグリティーですが、だれもがつけれる画期的な方法を鳴川さんが見つけたことで、それがいかに強く安全な構造体であるかを、多くの人に伝えることが可能になりました。こうした組立図も「かたがみ」のひとつと言えるのではないか、と鳴川さんは考えています。むずかしい論理や数式を使うことなく、組み立図通りにつければ自然とできてしまう「かたがみ」です。鳴川さんの研究は、私たちの慣れ親しんでいる平面図・立面図・断面図といった設計図の可能性を超えて、立体をつくる方法が他にもあることを教えてくれました。そしてその変換の作業に必要なのが「かたがみ」だったのです。

オーサグラフ・グローブ
球体の地球から世界地図を作る手順がわかる「かたがみ」。球の歪みを分散して平面に落とし込み、実際の面積を極力保つように工夫されています。球の中に入れ子状に納まった2つの立体に、段階的に描き写す仕組みがわかるペーパークラフトです。地理・地形・地球をテーマにした、ジオグラフィアのプロダクト。

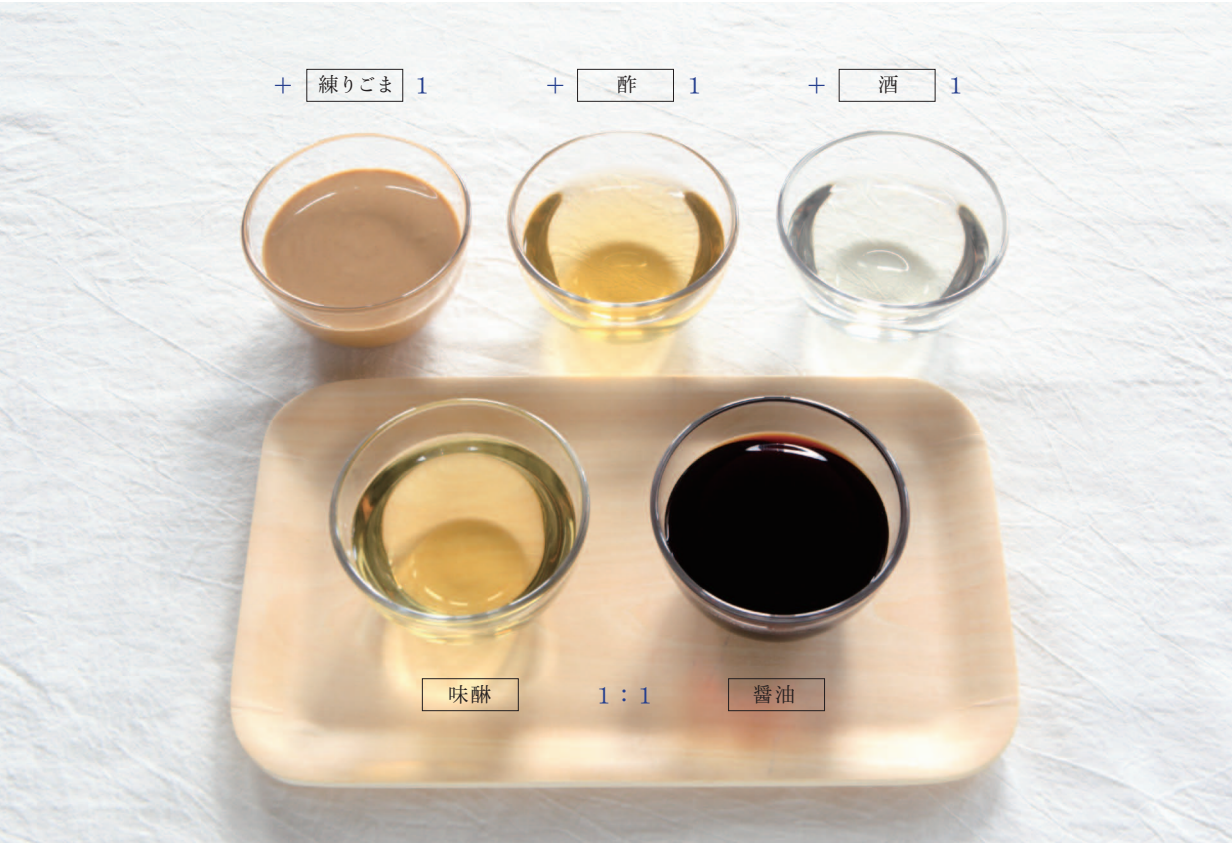


鳴川 肇 Hajime Narukawa
建築家・構造物家

立体幾何学の研究を軸に、世界地図の開発、建築、構造計画、美術制作などに従事。基本設計と実施監修をした日本科学未来館の「つながりプロジェクト」が2011年に完成。

日本料理に潜む、かたがみ。

おいしいのはわかっている、いざ自分で作るとなると、なんとなくハードルが高い和食。ところが、和食の味付けは、ごくシンプルな「割合」でできているといいます。そんな「味のかたがみ」を示してくれたのは、京都を代表する老舗料亭・菊乃井の当主、村田さんです。



1000 の料理に、1000 のレシピは必要ない。

「日本料理は、非常に単純なもんなんです」開口一番、村田さんはそう切り出しました。いろいろな調味料を入れるほど、手間をかけるほどおいしくなる、とは限らないのが料理だといいます。「特に家庭料理では、いらんもんは入れない。余計なことはせんでいい」と。日本料理を極めた村田さんにそう言われると、なんだか救いの神に出逢ったような気になります。「非常に単純な」日本料理ですが、村田さんが修行している頃には、そのルールをひとつにまとめたものはどこにもなかったそうです。いろいろな本を読み、あちこちに書いてあることをつなぎ合わせていくと「ああ、こういうことか」と腑に落ちる。ルールがあっても、「それとなく」伝えるのが日本の文化風土だったのかもしれません。そのルールを、誰にもわかる形にして見せたのが、村田さんの著書「割合で覚える和の基本」。調味料やだしをシンプルな割合で合わせるだけで、ピタリと味が決まる魔法の本です。そこには、煮物から焼き物、酢の物、和え物、汁物、ご飯物、つゆまで、あらゆる家庭料理の味付けが単純な割合で示されていて、まさに「味のかたがみ」と呼びたいものです。村田さんの本によると、味の基本は、醤油と味酢（みりん）が1：1。（ただし、ここで言う味酢とは、味酢風調味料ではなく本味酢のこと）肉じゃが、きんぴら、魚の煮付けなど、



和食の味付けをシンプルな割合で示した村田さんの著書「割合で覚える和の基本 村田吉弘／NHK出版」

定番のおかずの調味料は「それだけで十分」と言い切ります。日本料理というと、普通はまず「だし」の話から始まるものですが、基本の項目では「だし」すら登場しません。なぜなら、野菜からは昆布と同じグルタミン酸が、魚肉からは鰹節と同じイノシン酸が出るから。〈昆布＋鰹節〉のだしと同じ構造の時には、わざわざだしを取らなくてもよいというわけです。基本の〈醤油1：味酢1〉に、その他の調味料1を加えてバリエーションを広げる〈1：1：1〉や、煮物を上手に煮るための〈1：1：8〉、乾物を上手に料理するための〈1：1：10〉など、単純明快な「割合」は、まるで手品のよう。この割合さえ覚えてしまえば、お料理をしたことがない男性でも、おいしく作れそうです。村田さんによると、日本の調味料は、減塩醤油などを除いて、醤油の塩分濃度・酢の酸度・味酢の糖分は、どれも同じ。だから、メーカーによって基本の割合を変える必要はありません。その背景には、何でも削ぎ落していく日本文化の影響があるといいます。削ぎ落していくうちに、ものの本質や法則性が見えてくるということなのでしょう。

味付けだけではありません。日本料理では、すべてにおいてルールが決まっている、と村田さんは言います。たとえば、ものの寸法をまず整えること。面白い話を聞きました。ものを食べる時、普通に口を開けた時の大きさは、タテヨコ3cmくらいといわれます。この「口中（こうちゅう）体積」を基準に、箸でつまんで無理なく口に入る大きさを考えると、食べものの一切れの幅や長さは3cmくらいに。箸のスペースも考慮すると3×2×1cm程度になり、しかも、そのくらいの大きさがいちばんものの味をよく感じられのだそうです。だから、プロがお造りをつくる場合は、3cmという寸法を意識して切りつけるのだとか。そして、刺身醤油を入れる小皿も、3×2×1cmの造り身が無理なく入る大きさになっているといいますから、驚きです。どうすれば食べやすいか、美しいかを考えた昔の人の合理性は、器のサイズにまで及ん

1：1	味の基本 醤油と味酢が1：1。ご飯がすすむ、基本の味です。
1：1：1	バリエーション 醤油と味酢に、同量の酢、酒、練りごまなどをプラス。
1：1：8	煮物上手 煮汁のもとになる「だし」を加えて、メインのおかず。
1：1：10	乾物上手 淡白さが持ち味の乾物には、「だし」の量を10倍に。
1：1：15	旬の煮物 だしが主役の合わせ地。薄味の煮汁も一緒に味わえます。

でいたのです。ここに「箸文化としての日本料理の特徴がある」と村田さんは言います。同じことは日本建築にも言えるでしょう。たとえば畳1枚の大きさが決まった時点で、ふすまの大きさが決まり、床柱の太さが決まり、それに合わせて掛軸の大きさも決まる。ある程度の決めごとをつくり、抑制のきいた中で、節度と品位を保って生まれる静かで確かな輝きを日本文化と呼ぶなら、こうした決めごと自体が、日本文化の「かたがみ」と言えるものかもしれません。日本の「料理」とは、「理をはかり定める」こと。生がおいしいと定めてそれを切れば、キュウリを切るだけでも料理として成立する世界です。そこには、まだまだ私たちの知らない「かたがみ」が潜んでいるような気がします。



菊乃井の秋の一品。素材はもちろん、器やあしらいにも季節感を映すが、日本料理の約束事です。



村田 吉弘 Yoshihiro Murata
京料理店「菊乃井」三代目主人
京都と東京の3店で厨房に立つ傍ら、テレビの料理番組などにも出演。NPO法人日本料理アカデミーの理事長として、日本料理を世界に発信するための活動にも力を尽くしている。

家具のかたがみと無印良品

「かたがみ」という言葉を軸に、プロダクトデザイナーの深澤直人さんから、無印良品の家具づくりへの想いを聞きました。「かたがみ」は、単に平面の紙ではなく、「ものづくり考え方、思想」としてとらえることもできそうです。



6分の1でつくられた模型。背景のものと一緒に同じスケールでつくり、実際の空間を再現しながら、そのかたちを検証します。

大切なことは、形づくるのに無理をしないこと。

暮らしの中に「かたがみ」があるとすれば、無印良品のものづくりとは、暮らしの「かたがみ」を発見していくこと。そして、その「かたがみ」をもとに、素材に最小限の手を加えて、暮らしに魅力をつくっていくこと——深澤さんは、そう語ります。そこから生まれる製品は、料理にたとえば基本のスープのようなもの。できるだけ薄味で“うまい”という感じだけが残るスープには、そこに何かを加えられる余地が残されています。深澤さんが追求しているのは、そんな可変性、普遍性なのでしょう。暮らしとは何かの行為を伴うもの。食べる、書く、収納する、それぞれの行為にはそれにもっとも適した大きさがあり、

そこから大きさは自ずと決まってきます。その大きさを見極めることが自分の仕事だと言う深澤さんは、大きさを決めるために、必ず原寸大の模型をつくるのだとか。そして、それを空間に置いて確かめていく。そうすることで、必要な大きさが自然と見えてくるのです。「本来、家具はその大きさ（＝平面）があれば、あとは何も無いほうがいい。厚みも支柱もなく、ただ浮いていればいい」とも語る深澤さん。本当はその平面だけがあればいいのですが、それでは家具として成立しません。板の厚みも、カタチも必要です。そこで、最小限の手を加え、平面から魅力的な立体へと変換させていくのが、深澤さんの仕事。素材の特



原寸大の模型をスチレンボードなどで再現し、日常の空間の中に実際に置いてみたところ。大きさだけでなく、板の厚みや角のRなども原寸で確認していきます。

性を生かして、適正な厚みや支柱、角のRの大きさなどを決め、そのモノがカタチとして成り立つぎりぎりのところを見つけていきます。流行に左右されず、装飾をつけず、モノのあるべき姿を残した最小限の施し。そこから「作家の主張」は見えてきません。深澤さんが理想とするのは、「例えば箸袋を折って箸置きにするような、生活の中で誰もが自然にやっている」自然発生的なものづくりなのです。そこには、「家具は見るものではなく、使って感じるもの」という深澤さんの想いが反映されています。「薄く、軽くをめざす技術の革新は素材の研究としては必要だけれど、“世界一薄いテーブルをつくりたい”というのは作家のエゴ。それが人々の暮らしを豊かにできるのか、みんなの幸せにつながるのかを考えなければいけない」と言うのです。「やり

すぎていないか、逆にミニマムになりすぎていないか」と、常に自問自答しながら進めるものづくりの現場には、深澤さんとスタッフの人たちが共有する、目に見えない「かたがみ」があるのかもしれません。



深澤 直人 Naoto Fukasawa
プロダクトデザイナー

人間の無意識の記憶や行為から導き出すデザインで知られる。そこから生まれた壁掛け式CDプレーヤーは無印良品で商品化され、ニューヨーク近代美術館の収蔵品となる。2002年より無印良品のアドバイザーボード。2012年7月、日本民藝館五代目館長に就任。

暮らしの「かたがみ」

この特集では、その道のプロフェッショナルに「かたがみとは何か」ということを問いかけてみました。具体的に何かを組み立てるための文字通りの「かたがみ」ととらえる方、基本の知識や体系をとらえる方、さらには「かたがみ」の概念を広げてものをつくるための思想や哲学をとらえる方も。その答えはさまざまですが、そこに共通するのは、情報を整理して、削ぎ落としていくという考え。情報を増やすのではなく、逆に少なくしていく。そうすることで得た、より高度で密度の高い情報を、ものをつくり出す行為につなげているということです。「極める」とは、そういうことなのかもしれ

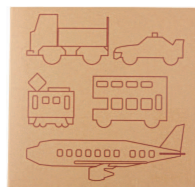
ません。ものづくりのための「平面のかたがみ」と、暮らしの基本となる「概念としてのかたがみ」が、少しずつつながったようにも思います。「自分の手でものををつくる喜び」を発見する—そんな時代が訪れているのを感じます。それは、暮らしの基本を見つめ直すことにもつながっていくでしょう。暮らしを豊かにするとは、暮らしの基本を見つけ、削ぎ落としていくことなのかもしれません。そんな基本を考えると、「かたがみ」がひとつの視点になればと思います。

無印良品のかたがみ

切り取り、組み立てることで、予想通りのものを手に入れられる。
そして、自分で作るための基本を学ぶこともできる。
「かたがみ」のそんな特長は、無印良品の商品の中にも生かされています。

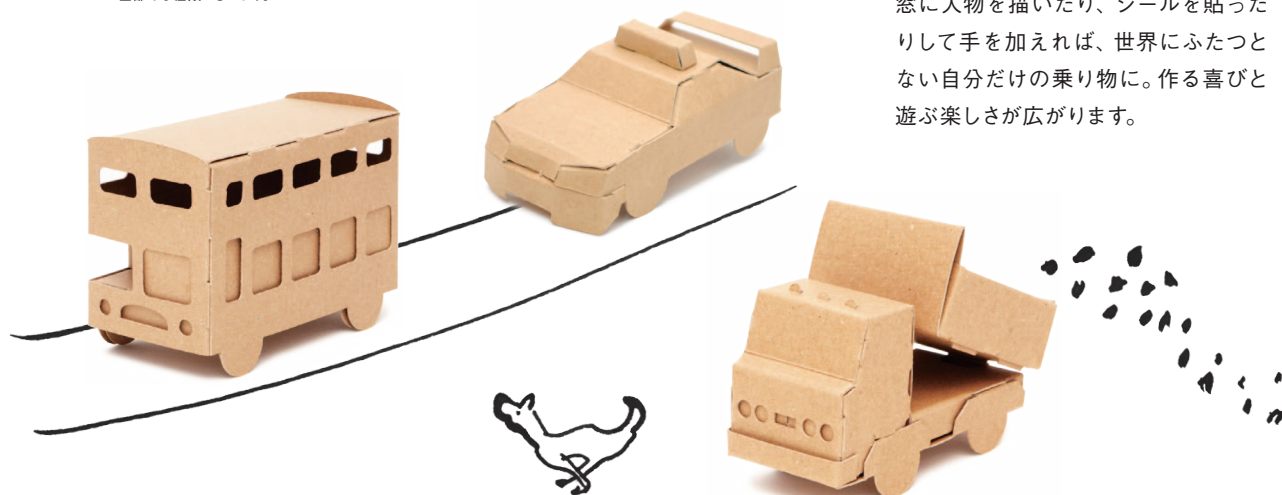


一緒に遊ぶ工作絵本 乗り物



一緒に遊ぶ工作絵本 乗り物
1525757
税込1,000円(販売中)
※「一緒に遊ぶ工作絵本シリーズ」は
全部で9種類ございます。

5種類の乗り物を1冊にまとめた工作絵本の中面。
右ページにはそのまま切り抜ける型紙が、左ページ
には組み立てプロセスの説明文が入っています。



2009年にデビュー以来、多くの子ども
たちに愛されている「一緒に遊ぶ工作
絵本」シリーズ。第一号の「かおノート」
にはじまり、100のかたちを集めて
1冊にしたテンプレートの絵本、文字を
切り抜いて組み立てていくとその頭文
字から始まる動物ができる「アルファ
ベット動物」、やわらかブロックなど
など、遊びの世界を広げるさまざまな
「かたがみ」を用意してきました。

働く乗り物をモチーフにした「乗り物」
は、台紙に描かれた型紙をミシン目に
沿って切り取って組み立てるペーパー
クラフト。ハサミも糊も使わずに、飛行
機やパトカーなど5種類の乗り物を作
ることができます。軽く手にやさしい紙
製なので、小さな子どもが扱いやすい
のもうれしいところです。色を塗ったり、
窓に人物を描いたり、シールを貼った
りして手を加えれば、世界にふたつと
ない自分だけの乗り物に。作る喜びと
遊ぶ楽しさが広がります。

自分で作る楽器



紙のたいこ

胴体に業務用の紙管を使った紙の太
鼓です。紙の両面に糊づけて胴体に
張り、付属の輪ゴムで固定して半日くら
い乾かしたら完成。作業自体は30分
もかからないくらい簡単ですが、自分
で組み立てながら、同時に音をつくって
いくというわくわく感は、楽器作りなら
ではものでしょう。紙製とは思えない
ようなしっかりした仕上がりで、ずしん
とお腹に響く太鼓らしい音が特長。
そのまま使うのはもちろん、絵を描い
たりシールを貼ったりすれば、世界に
ひとつだけの太鼓になります。



じぶんでつくる楽器 紙のたいこ
税込1,700円 ※12月中旬発売予定

紙の三弦ギター

太鼓と同様、ボディに業務用の紙管を
使った三弦ギターです。太鼓が初心者向
けとしたら、こちらは、もう少し作りがい
のある中級者向け。ボディを組み立て、
3本の弦を張って作ります。音の高低は、
弦の巻き加減で調整。乾かしでは組み
立てる、という作業を繰り返しますの
で、制作にかかる時間は半日くらい。作
る過程をたっぷり楽しみ、できあがった
ら弦をかき鳴らして楽しめます。絵にな
る形なので、弾かないときは壁に飾る
とインテリアにもなりそうです。



じぶんでつくる楽器 三弦ギター
税込2,900円



※2013年春の発売予定(安心してご使用いただく
ために、使用試験中です。結果により発売を見合わせ
る場合がございます)

ギフトパッケージ

美しく包むための、かたがみ。

小さなお菓子ひとつでも、気持ちを
こめて贈りたい。贈る人のそんな気
持ちは表現できるように作られた
パッケージです。型紙をあてて切り
抜いただけのシンプルなフェルト地
が、そのまま、包むための「かたが
み」に。贈る心を美しく包みます。



フェルト地に型紙をあてて切り抜きま
した。切り込み線にもワケがあります。



組み立てながら、贈りものを入れます。
小袋入りのお菓子も入れやすいサイズ。



頂上には、ツリーと靴下、雪だるま。

ポリエステルフェルトギフトボックス3個セット
(赤:くつ下、緑:ツリー、白:雪だるま)
税込1,000円(3個セット)